



佛
書
文
庫

三十一

25
か
の
な
ま

02

5
1139
25



1139
25



かゝる花のさか

若野明

とう鳥くしはくをぬやう上桂瑠
 赤くぬぬやう初めのそく梅 葉山
 若くぬぬ花を懐くやう層 一松
 花のぬぬのさかすてをさし 日宝
 早のぬぬのさかすてをさし 本宗文
 下戸らうくぬぬ花の男振 葉流
 花のぬぬのさかすてをさし 葉流
 えりや吉記をさすてをさし 葉流

烟ももね〜〜〜
 志相子や梅のさる月あかると
 は〜〜〜見〜〜〜
 苗原の葉と同心〜
 七〜〜のまを〜
 松也を〜
 子日世〜
 田のを〜

桂尾
 烟山
 玉成
 其扇
 旭晴
 花山
 雅長
 春畑
 菊雄

春々月桂木〜
 有種〜
 糸繫の奴〜
 夕雲の〜
 一梅〜
 糸〜
 初〜
 糸〜
 糸〜

赤水
 花被
 餅石
 雲鶴
 玉守
 武人
 武人

を著の本意を先達む心へ年 西京 福所
梅もまやあま玉はるる河へ心相列 閑茶
笑うけく一おのり福寄子 籠前 鷗々
琴指も 葎柿をふかすう海光 肥後 梅露
梅も鳥孫を家とあつらふり 乙亥
蓮華や人へ昔こころをこころ 宇山
おろくろく一尾を尾の尻に 永熾

年とや都へふ古を家法く 白言 昇鳳
まじりて日頃のしゆのれ者う水 伊予 桂友

物河へ心ちのあつたこみ代とまじく 室二 心物
こころのあつたのれ乃 於心 下谷 茶丸
鬼を舟をこころへやま 赤坂 伯鶴
節小節心をもくあつた心をもく 芝 其木
あまのふ所の整りり 節海夜 李紫
高砂の縁も脱ゆんまつ 噺子 穂葉 朴椽
まじりて日頃のしゆのれ者う水 扇の京 三青改 孤峰
初着のあつたやあつたん 新木 山 七十三歌 沙山
まじりてのあつたもつたん 完 完

さうらうの光やまを志の花 静知

顔くまをまを門れ者 花野

いのちや門くまを鬼あふ 吳仙

雪や花をまを 大香

子福者のかまを子の子香 三好守

昇るまをまをまをまのむ 林甫

くまをまをまをまの花 謝池

連をまをまをまのま 田佐

まをの子まをまのま 和風

まをまをまのま 室三

まをまをまのま 柳人

まをまをまのま 赤坂

まをまをまのま 花乙

まをまをまのま 如島

まをまをまのま 川 万治

まをまをまのま 子 孤醒

まをまをまのま 馬十 花梨

まをまをまのま 京 我隣

蘇婆のや 籠をうえ鞠の敷芝 桂直
 ちつあ葉を以て余をぬれとて入 室町 成紀
 福分をうけぬ御おまつり 大年
 鳥羽も玉とていそいでて和歌 伯志
 順ふふいそいでていそいでて 薄雲
 子日野やとちの向ふもさるる 葛谷
 中あむりや 高きも海の家 川 池月
 第にさるる 波流ひきん小松 貞 八十二歌 千今
 おおちり角をうけとていそいでて 瀨 富水

一つさるる 峯をうえ 福高子 学笠
 ちつあ葉を以て余をぬれとて入 室町 成紀
 七十四歌 業裁

助多や 務所の杉の影 鳥 桂花
 徳保姫を未見恋や 鏡 解

新平伝言

花鳥や 舌を以て余をぬれとて入 室町 成紀

明治十二年七月



